国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成28年5月1日発行　第40巻第5号通巻第464号

月刊みんぱく

2016 5月号

特集 たまり場

沖縄のユタと女のたまり場　吉田佳世 ／ オフィスのたまり場　八巻惠子
バルセロナの日本人宿　大野哲也 ／ マンチェスターの水タバコ店　川瀬慈
それぞれの酒場　金田純平 ／ 海辺のたまり場から　馬場雄司

茶をしばく

林 哲夫

喫茶店はお茶を飲む場所……ではない。じゃあ、何をするのか？「人は何もしないでいることはできない」とフランス人の誰かが言っている通り（中国人なら為無為と言うのだろうが）、人は何もしないでいようと思ったときに、お茶や珈琲を飲むのである。あるいはお茶を口実にして別の何かをするのである。

『喫茶店の時代』（二〇〇二年）という本を出してしばらくしたころ、衛星放送のある番組に出演することが決まった。五人ほどのクルーが張り付いて、およそ一週間、拙宅はもちろん、京都の古本まつり、大阪での装幀本展示会など、さまざまな場面を撮影した。ベテランのカメラマン氏はあるシーンが終って一段落すると、すかさずこう言うのだ。

「ほな、チャア、しばこか」

チャアしばく、まだ何か撮るのだろうか？　初めて聞く言葉だった。連れて行かれたのは馴染みの喫茶店、要するに「一服しよう」のココロである。

関西地方で広く用いられる「しばく」とは「打つ、殴る」であろう。日本国語大辞典第二版はシワ（撓）・ク（叩くの意を表わす語尾）という前田勇の語源説を引いている。かなり古い方言のようだ。残念ながら「茶をしばく」という用例は採られていなかった。さらにネットで検索してみると、一九八〇年代から流行った若者言葉だという語釈が見つかった。一説には大阪の高校野球部員たちが喫茶店に行くことを「ティーバッティング」と言い始め、それを日本語に直して「茶をしばく」になったという（もちろん誤訳）。牛しばく（吉野家へ行く）、オケしばく（カラオケへ行く）、ねずみしばく（ディズニーランドへ行く、開園一九八三年）などの類似した用例もある。「しばく」は河内弁で「する」の意だとも言い、また上方芸人が全国に広めたとも。

何をするのか？　ということで、忘れられない喫茶店がある。七〇年代の終りごろ、東京都心の学生街。民芸調のインテリア、棚には白い陶磁器が並べられていた。女友達と二人で入って珈琲を注文した。ひと息ついて彼女がノートに手紙の下書きを始めた。すると店主が飛んできて怒り出したのだ。

「ここは珈琲を飲むところだ！」

え？　耳を疑った。珈琲を飲む行為だけしか許されない喫茶店、そんなもの考えられるだろうか。「勉強するなら出て行ってくれ！」。勉強じゃないと抗弁しはしたものの、あきれ果てて早々に退散した。今から考えれば、図らずも喫茶店の本質を教えてくれた事件だったのである。

「茶しばこか？」、先日、試しに近所の娘さんを誘ってみた。「そんな言葉、うちは使わへん」、キッパリ。まさに空振りであった。

プロフィール
1955年香川県生まれ。画家。武蔵野美術大学卒業。著書『喫茶店の時代』（編集工房ノア）により第15回尾崎秀樹記念大衆文学研究賞受賞。編著・装幀『書影でたどる関西の出版100』（創元社）により第9回竹尾賞デザイン書籍優秀賞受賞。他に『歸らざる風景――林哲夫美術論集』（みずのわ出版）、『古本デッサン帳』（青弓社）、『古本屋を怒らせる方法』（白水社）などの著書がある。

月刊 みんぱく
5月号目次

1 エッセイ　千字文
茶をしばく
林 哲夫

特集　たまり場

2 沖縄のユタと女のたまり場
吉田 佳世

4 オフィスのたまり場
八巻 惠子

5 バルセロナの日本人宿
大野 哲也

7 マンチェスターの水タバコ店
川瀬 慈

8 それぞれの酒場
金田 純平

9 海辺のたまり場から――老いた漁師たちの安らぎの場
馬場 雄司

10 ○○してみました世界のフィールド
アンデスの聖地をめぐる
八木 百合子

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
カラーチ
大塚 奈美

16 文化遺産おもてうら
観光資源活用と文化保護
――中国、世界遺産「麗江古城」
高倉 健一

18 手芸考
ニッポンの「手芸」――近代から現代まで
山崎 明子

20 ながなんぢゃ
ほとけの名前
末森 薫

21 次号予告・編集後記

特集

たまり場

職場の休憩室で、旅先の宿で、酒場やカフェで「たまる」人びと。息抜き、雑談、情報交換、根回しなど、「たまり場」は人と人との交流を提供する。肩ひじ張らないインフォーマルな場で紡がれる関係性は、フォーマルな場にどのように作用するのだろうか。

沖縄のユタと女のたまり場

吉田佳世（よしだかよ）
日本学術振興会特別研究員（神戸大学）

男のたまり場、女のたまり場

沖縄には男のたまり場もあれば、女のたまり場もある。例えば、那覇市にある公園のいくつかは年配の男性のたまり場だ。気候がよい時期には昼ごろから集まって、なにやら楽しそうに遊んでいる。何をしているかというと囲碁やトランプ、花札などなど。もちろんおしゃべりだけしにくる人もいる。そのため誰がもってきたのか、ちゃっかり机や椅子、日よけのテントが用意されていたりもする。

では、女のたまり場はどこだろうか。もちろん、ゲートボールやグラウンドゴルフをたしなむ女性であれば、グラウンドの隅で友だちとおしゃべりに花を咲かせることもある。でも、女のたまり場はどちらかといえば屋内であることが多い。友だちの家やその軒先、マチヤグワー（小さな商店）、喫茶店、ランチバイキングをしているレストラン、そして意外とあなどれないのはファストフード店である。わたしがフィールドワークをしている集落の近くにも、最近、二四時間営業のファストフード店ができた。さっそく仲良しのネエサンたち（沖縄では女性はいくつになってもこうよばれる）といってみると、店内はコーヒーを飲みながらおしゃべりに花を咲かせる五〇代から七〇代ぐらいの女性たちであふれかえっていた。忙しい沖縄の女性たちにとって、安くて、長居できて、いつでも開いているこのグローバリゼーションの申し子は、既婚未婚、仕事の有無、育児や介護の有無を問わず、どんな立場の友だちでも気兼ねなく誘える場所なのかもしれない。

ファストフード店の様子（2016年2月20日）

ファストフード店でおしゃべりするネエサンたち（2016年2月20日）

共有されるユタの情報

女のたまり場ではさまざまなモノやサービス、そして情報が行き交う。そのなかでも、霊や祖先などと交信する力をもち、その能力をもとに個人的な相談を受けることを生業としているユタとよばれる人びとに関する話題は、たまり場でよく登場するもののひとつである。ユタはよく「看板のない商売」といわれるように、どこにユタがいて、どのような類の依頼を得意としているのかは一見しただけではわからない。だから、ユタに相談したいと思ったら、ユタを知る人（大抵は親せきや友だちなどの親しい間柄にある人である）を通じて依頼をし、ユタから許可を得たうえで、足を運ぶという形がとられることが多い。そのため、たまり場で交わされるユタについての経験談や噂は、ユタに関心をもつ女性にとっては重要な情報源となる。

また、ユタのもとに足を運ぶ人のなかには、仲の良い友だち数人と連れ立って行くという人も少なくない。その理由は、緊張を和らげるためであったり、ユタから言われたことを忘れないように共有してもらうためであったりする。だから、女性たちがユタのもとに行った後に喫茶店やファストフード店に立ち寄って、ユタから言われたことについてあれこれおしゃべりをするというのもよくある光景だ。その様子は、ユタの託宣を鵜呑（うのみ）みにしているというよりは、友だちとあれこれおしゃべりをすることで別の答えを作り出しているように見える。これまでユタは、一方で迷信として否定されながらも、他方で相談者の悩みや苦しみを癒すカウンセラーのような存在とみなされてきた。しかし、ユタとのやりとりだけではなく、このたまり場でおしゃべりする時間が女性たちの癒しに一役買っているとわたしは思わずにはいられないのだ。

公園に集まる男性たち（2016年2月13日）

オフィスのたまり場

八巻恵子
就実大学准教授

ドリンクコーナーで雑談

仕事の息抜きの喫煙所、ドリンクコーナー、トイレ、通勤途中、コピー機の前、従業員が「たまる」とき、仕事役割から個が垣間見える。

喫煙所

喫煙所は部署や階層を超えて従業員が共有する空間だ。一〇〇人も超える組織だと、たばこ片手に、「〇〇部の△△です」と自己紹介をすることもあるし、上級管理者が新人と同席して、仕事と関係のない話もする。昨晩どこに行ったとか、趣味のことなど、難しい話題は出ない。喫煙所はある種のコミュニタスで、社内の垣根を越えたゆるいつながりを生み出す。吸い終われば早々に勤務に戻るが、雑談から仕事が生まれることもある。上昇志向の強い社員が社内政治の手段に喫煙を始めることも珍しくない。喫煙仲間が発起人となって野球チームを設立させたというIT企業の例もある。新しい活動のきっかけも生まれる。

ドリンクコーナー

自販機やウォーターサーバー、会社によってはお菓子や軽食も置かれている休憩スペースで、雑談や打ち合わせに利用される。あいさつを交わす程度がほとんどだが、特定の人と話をする目的でタイミングを合わせて行くこともできる。あるコンサルティング会社では、業務上、交流のない他部署の誰かの支援を取り付けたいとき、情報を提供してもらいたいとき、協働体勢をとりたいときなどは、相手の仕事場に直接行かずに、たまり場で交流を図り、感情を交えた雑談を通じて次の約束を取り付けることがよくあるという。

喫煙者の楽しみと仲間意識

たまり場の機能

日本の企業共同体の会議は承認を得るためのシステムになっていることが多い。意思決定をスムーズに運ぶために、議論は事前に済ませ、決定までの筋書きは会議の外で練られる慣習がある。飲食を伴う非公式な交流では本音や感情も出やすく、このような「根回し」は時間効率化のための合理的な行為でもある。大事な話だけでなく、仕事の愚痴や上司の悪口を吐露するためにも、オフィスのたまり場は、込み入った話の導入口としても機能している。「続きは外で食事でもしながら」「今度あらためて打ち合わせを」という約束がたまり場で成立しやすい。

「たまる」理由と効率化

オフィスのたまり場は、息抜きと同時に、仕事上の内緒の話、社内における自分の立場の確認など、様子をうかがう機会にもなっている。しかしながら、企業がより効率化をはかり、管理や評価のシステムが整ってきた今日、従業員は役割を自覚して機能的に動いている。大企業の給湯室やトイレが女子社員のたまり場だったのは、お茶くみ担当の事務員がいたころのことで、「一九八〇年代にはもういなかった、デスクで新聞を広げるようなだらだらした社員もそのころには消えた」と、一部上場メーカーの社員は言う。従業員が「たまる」ことの合理性は、ある種のなれ合い関係が生産性にも寄与しているということでもある。わたしが勤務していたドイツ企業では、休憩時間に日本人従業員が通路で「たまって」話をしていると、「休憩場所に行って早く休みなさい」と欧米人の上司に怒られた。合理的で機能的な組織になるほど、「たまる」理由が作りにくくなるようだ。

バルセロナの日本人宿

大野哲也
桐蔭横浜大学准教授

ペンション・チキートの現在の外観。ビルの4階部分のワンフロアーがペンションになっている

他者に依存する旅

人類の歴史は旅の歴史である。

なにせ、アフリカ大陸で誕生したヒトが、徒歩でユーラシア大陸に入り、東端まで横断し、ベーリング地峡を渡り、北米大陸を南下し、南米大陸最南端まで旅をしたのだから。

旅好きの人類は、これまで、「馬」から「スペースシャトル」まで、さまざまな旅の形態や方法や道具を発明し、それによって社会を発展させてきた。この変化に連動して、過去の「放浪的な旅」から「システム化した旅」へと旅の様式も移行していった。

こうした旅のスタイルが変化するなかで、過去の放浪的要素をもっとも色濃く残している現代的実践のひとつがバックパッキングである。

もちろん、バックパッキングも時代とともにその内実が変化しているのだが、変化しない要素に、旅人が特定の場所に「たまる」という現象がある。日本人バックパッカーを例にすれば、世界各地にある下宿屋然とした日本人宿は、たまる場所の代表格だ。

バックパッカーが日本人宿に到着し、そこで出会った旅人と会話を交わすことで彼らの旅の情報が宿という空間に蓄積されていく。さらにガイドブックやインターネットの情報も、そこに加算されていく。彼らは、こうして集積された旅のデータを参照しながら、自己の旅のアクティビティや次の目的地や移動方法などを決めていくのである。日本人宿は、いわばバックパッキングのハブなのだ。

リアルからバーチャルへ

一九九三年五月に日本を出国して自転車で世界を放浪していたわたしは、一九九七年一〇月にスペイン・バルセロナにある「ペンション・チキート」という名前の日本人宿に流れ着いた。ここは、ドミトリーと個室の二タイプの客室があるものの、風呂とトイレとキッチンは共同なので合宿所のような宿だった。

当初は、数日間の滞在ですぐに出発する予定だった。だがわたしは、つい魔がさして二カ月以上も宿泊してしまう。理由は単純、美術学校に入学して絵の勉強をしていたからである。宿のなかのたまり場であるリビングで他の旅人たちと雑談をしているとき、そのうちの一人からもたらされた「美術学校が面白いらしい」という情報に飛びついたのだ。

わたしは美術に関心がないので、二カ月間の学びを経ても腕は上がらなかった。だが、日本人宿というたまり場には、そんな気まぐれを起こさせる不思議な力がある。きっと、わたしが宿を出た後も「面白い美術学校」という情報は宿に保存され続け、後にやってきた誰かが入学したことだろう。

それから一八年後の二〇一六年一月、わたしは久しぶりにチキートを訪れた。

わたしが驚いたのは、一八年前とは旅人のメンタリティが激変していることだった。リビングで見知らぬ旅人同士が出会い、旅の雑談を交わすというカルチャーは、もはや消失しつつあった。そのようなことをしなくても、スマートフォンで、口コミよりも的確な旅の情報がいくらでも入手できるからである。

旅ではなく、日々の生活で「スマートフォンに没頭している人」は街に溢(あふ)れている。空間の個化が進んでいるわけだが、それはそのまま旅の場面でも当てはまるようだ。

では、空間を個化するのであれば他者の属性に頓着する必要などないはずなのに、なぜ彼らはいまだに日本人宿を目指すのだろうか。

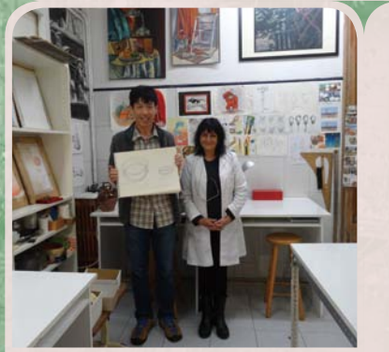
それに対する答えは、おそらく「安心感」なのだろう。「短時間ならば、部屋の扉を開けたままでも、リビングに私物を置いたままでも大丈夫だろう」という安心感だ。

たしかに一八年前のチキートにも、この安心感はあった。しかし現代のたまり場は、過去のたまり場とは、期待される機能が変化してきている。

現代の旅人は、旅をより快適にするために「対面的な特定の他者」を必要としているのであって、旅を遂行するために「対面的な特定の他者」を必要としているわけではない。つまり旅の実践に必要不可欠なツールとしての「リアル」なたまり場は、今その有用性を減らしつつある。それと反比例するように、ネット空間にある旅のデータベースという「バーチャル」なたまり場は、重要性を高めつつより高機能化してきている。

社会と旅人のメンタリティの変化に連動して、重層的に遍在しているたまり場の機能が変化し、それによってあらたな旅が創出されているのである。それと同時に、あらたな旅が生成されることであらたなたまり場が重層的に創造され、それによって社会と旅人のメンタリティが変化してもいるのである。

この相互作用のダイナミズムこそが、たまり場の魅力でもあり旅の魅力でもあるのだろう。



2016年1月にバルセロナを再訪し、美術学校に再入学した

マンチェスターの水タバコ店

川瀬 慈(いつし)
民博 文化資源研究センター

通りに満ちる香り

英国マンチェスター大学の近所に通称〝カレー通り（Curry Mile）〟という場所がある。そもそもこの通りの名は、カレー料理を中心とするレストランの多さに由来するのであるが、シーシャ、あるいはフッカとよばれる水タバコを吸うことができる店が所せましとひしめき合っている。日の沈むころになると、そこらじゅうの水タバコ店から、甘くフルーティーな煙が路上に流れ出し、南アジア料理に特有の香辛料の匂いと溶け合い、通りを満たしていく。

水タバコの形態は多様であるが、基本的に果物の香りがつけられたタバコの葉の上で炭を熱し、そこから出る煙をガラス製の容器のなかに入った水を通して吸うという点はおおむね共通している。炭は約二〇分おきにとりかえられ、ひとつの水タバコで、だいたい一時間三〇分から二時間程楽しむことができる。複数で楽しむ場合は通常、プラスチック製のマウスピースを使い、回し吸いをおこなう。カレー通りにおいて人気の水タバコは〝ブレッシュ・シーシャ〟という類である。これは、真ん中をナイフで器用にくりぬかれたリンゴやパイナップル、あるいはオレンジ等の果物のなかにタバコを入れて吸うというものである。

マンチェスターの通称「カレー通り」

ダマスカスに集う

水タバコの起源は中東とされ、中東や北アフリカのイスラーム圏で嗜好(しこう)されてきたといわれる。カレー通りでも、水タバコ店の経営者や客は圧倒的に中東や北アフリカからの移民が多かった。わたしがマンチェスターでの研究生活の合間によく好んで行っていたカフェ・ダマスカスは、シリア移民が経営し、シリアの人びとが集う店であった。しかしながら、長いことこの店に出入りしていると、そこが決して水タバコを味わい、楽しむだけの空間ではないということがわかった。カフェ・ダマスカスでは、マンチェスターにやってきたばかりの同胞たちに、すぐに自立した生活ができるよう職業を紹介し、あっせんする業者が出入りしていた。また、店に置いてある色とりどりのチラシの中身は、求人広告であったり、シリア系の人びとの交流イベントに関する情報が中心であった。水タバコもやらずに、短時間だけ店に立ち寄る若者が多かった理由が今となっては納得できる。

そのような空間において、水タバコをやる黄色人種のわたしは、よほど目立つ存在だったのか、いつも客たちに物珍しくじろじろと見られた。カフェ・ダマスカスは、シリアの人たちにとって異郷の地で故郷とつながり、新天地での生活に向けた情報を収集する重要なサロンであったのだろう。

水タバコ店の前の看板には水タバコが描かれている

それぞれの酒場

金田 純平（かねだ じゅんぺい）
民博 外来研究員

繁華街に駅前、人の行きかうところに酒場はある。仕事からの帰り道に待つかのように灯りをともす。なかにはすでに先客がいて、ある者は談笑しある者は静かに思い思いの酒を進めている。なぜ酒場に人は吸い寄せられるのか。ここでは、異なるスタイルの店をいくつか見ることで、酒場で人は何をするのか、何を求めているのかについて考えてみたい。

老舗居酒屋の風景――火曜一七時

大阪・阿倍野にある老舗居酒屋はカウンター席とテーブル席にわかれており、一人の客はカウンター、二人以上の場合はテーブルへと案内される。カウンターではおもに仕事帰りの初老の男性が静かに酒と料理を嗜（たしな）んでいる。時折、女性の客も見られる。BGMは流れておらず、時計の音のみが空間に漂い、阿倍野筋に面していた移転前の往時の話を女将と咲かせている客がいる程度である。

常連の集まるバー――土曜二三時

大阪・梅田のはずれにあるバーには常連の男女が集まり、マスターも交えておしゃべりで盛り上がっている。この日の話題は、不倫問題で辞職した議員のことや購入したというスターウォーズに登場するロボットBB―8のこと、プロレスのこと、キャバクラの女の子との付き合い方などで、流れのままに本当に他愛のない話題が繰り返されている。

酒好きが集まるバー――日曜一八時

神戸・三宮にあるスタンディングバーでは、気軽に利用できることもあっていつも客で一杯である。毎回異なるウィスキーやカクテルを注文する客もいれば、常に決まった注文をする客もいて、それぞれの客の酒に対するこだわりが感じられる。酒屋関係の客も来ており、「グレンリベット（スコッチの銘柄）の一二年が終売になる」といった事情通ならではのトークがおこなわれていた。また、この日おこなわれていた競馬について店長と話し合う客、もともと音楽関係の仕事をしていたスタッフと音楽談義をする客もいる。

立ち飲み屋の風景――水曜一八時

尼崎市内にある立ち飲み屋の客には、仕事帰りの男性のほか何人か女性も見られる。スーツ姿の客、普段着の客など様態はさまざまである。店員の女性に話しかける客もいれば、この日の競艇の反省会をする客もおり、テレビを見ながらニュースの話題で世間話する客もいる。

酒場はそれぞれの特色をもっている。それゆえに知ってか知らずでか客は自分の目的に合わせて店を選んでいる。静かに酒を嗜みたいとき、人と話がしたいとき、それぞれの酒場はその目当てに合った客を待っている。

立ち飲み屋の風景（撮影・尼崎市内）

海辺のたまり場から――老いた漁師たちの安らぎの場

馬場 雄司（ばば ゆうじ）
京都文教大学教授

ひとり暮らしの高齢者の孤独死が問題となって久しい。高齢化が進むなか、かつて生活の知恵の伝承者であった「老人」は、医療・福祉をはじめとするさまざまなサービスを受ける対象として「高齢者」と位置づけられるようになった。しかし一方で、高齢者とよばれる人びとは、それぞれの生活環境のなかで、人とのつながりを求め、居場所づくりをおこなってもいる。

護摩木づくりボランティア（農山村）

海辺のたまり場（漁村）

漁村の高齢者

今から一〇年以上前、わたしは、三重県の看護系大学に勤務し、紀北地方の漁村で保健師さんたちと老人クラブなどで高齢者支援活動をおこなっていた。老人クラブは男性の会長以外、ほとんどが後期高齢女性であることに気づいた。男性高齢者はどこへ行ったのだろうかと思い海辺を歩いていると、ふと、簡単なつくりの小屋が目にとまった。そこには、小型のテーブルと数脚の椅子が並べてあり、五、六人の男性高齢者たちが、日がな一日、海を見ながらおしゃべりをしていた。彼らの多くは元漁師で、昔の漁師の日々の思い出や、日々の他愛のない話がかわされていた。病院への行き帰りの道の途中でもあり、血圧の数値などの話をし、お互いに健康を気遣っていた。小屋を建てたのは元大工で、集まる人は会費五〇〇円を出し、ときには親睦旅行もおこなわれるという。女性高齢者が公民館で歌・踊りなどを楽しむ老人クラブとは異なるが、ここもまた、高齢者の安らぎの場である。元漁師たちには、公民館よりも、長年暮らした海の近くの方がよほど安らぐ。カラオケでも、海のシーンの見られる歌が好まれるという。

農山村の高齢者と異なる気質

この漁村のすぐ北に隣接する国道付近は、農業を営む地域である。ここでは、男性の高齢者を中心として、比叡山に納める護摩木を作るなどのボランティア活動をおこなう団体が活躍している。紀北地方のこのあたりの人びとは漁村と農山村の気質の違いをよく口にする。かつてひろうように魚の獲れた漁村では、中学・高校を出たら漁師になり、すぐに家を建てるほどだったといい、博打（ばくち）的要素もある漁業は、「一獲千金型」の気質を育むという。これに対し、農山村では、作物を計画的に育てる必要から「こつこつ型」の気質になるといわれる。「海辺のたまり場」と「護摩木作り」はそうした気質の違いから説明されたりもする。この是非はともかく、長年営んできた生業のなかで培われた身体感覚がその生活スタイルに影響を与えることは想像に難くない。相反する気質をもつふたつの村はときに対抗し合ってきた。子どもの運動会では互いに向こうの子どもに負けるな、とけしかけたという。しかしながら、ときに助け合う姿も見られる。海辺の小屋では冬の寒いときにドラム缶で焚き火をするが、その薪は、隣村で作る護摩木の廃材であったりする。

地域のなかにすでにあるつながりを見出す

ここには、老人クラブなど公的機関がかかわって用意する場所とは異なる、地域性に基づいた安らぎの場＝居場所を求める高齢者たちの姿が見られる。都市部では、喫茶店のモーニングなどでつながりを求めたり、昔のフォークソングで集う姿なども見られる。こうした地域の生活のなかにすでにある、その環境ならではのつながりや居場所を求める動きに、われわれはもっと注目すべきだと考える。

○○してみました世界のフィールド

アンデスの聖地をめぐる

八木 百合子　民博 機関研究員

聖地の土産物店にて

アンデス山岳地帯に点在するキリスト教の聖地。
けわしい道のりを経て、なぜ人びとは聖地へ向かうのか。
筆者自らが訪れて、見えてきたこととは。

祈りの地の姿

五〇〇〇メートル級の山々が連なるペルーのアンデス山岳地帯。この山間の地に「セニョール・デ・ワンカ（ワンカのキリスト）」という霊験あらたかな聖地がある。キリスト教世界では、イエス・キリストや聖母マリアが人びとの前に突如あらわれたという奇跡譚をよく耳にするが、ここペルーも例外ではない。ワンカの聖地は、キリストが出現したことに始まる。その起源は一七世紀に遡るが、今でも聖地のあるクスコを中心に人びとの篤い信仰の対象となっている。とくに病気治癒の神として知られ、白人やメスティソ（混血の人）から先住民に至る多くの信仰を集める。だが、その背後には、古くから山々を崇拝してきたアンデス独自の信仰があるのも確かである。

神々の奇跡や名声はもちろんだが、実際に聖地の空気を味わうことで、人びとがそこへやってくる理由が見えてくるのではなかろうか。そんな思いから、ワンカの聖地を訪れてみた。

ワンカの聖地は、クスコ市から南へ五〇キロメートル行った山の裾野（標高三一〇〇メートル）に位置する。巡礼者の多くは徒歩で向かい、しかも日帰りで行ける。加えて、バスや車での移動も比較的容易で、市内から聖地のある山の麓までは舗装されたゆるやかな道路が続く。

毎年九月一四日には祭礼がおこなわれることもあり、特にこの日を目指して多くの人びとが巡礼をする。わたしも聖地の賑わいを一目見ようとその日に合わせて向かった。真夜中に市内を出発してから歩くことおよそ六時間。朝日が昇るころ、ようやく聖地のある山の登り口に辿り着いた。そこから更に坂道を登ること三〇分。ついに教会堂が見えてきた。

集まった巡礼者がひしめき合う教会堂では、繰り返しミサが挙げられ、そばにある礼拝堂も願いを込めて灯した蝋燭で熱気に包まれていた。しかしそこから一歩離れ、聖なる空間の外に目を向ければ、ひとたび聖地に到着し、ミサを終えた人びとが、旅の疲れを癒しつつそれぞれの時間を楽しむ姿があった。汗を流すために沐浴をする人、持参した風呂敷のなかの食糧を広げて空腹を満たす人、木陰で仮眠をする人、草原で戯れる親子などさまざまである。

苦行の道のり

アンデスでは有名な聖地といえば辺境の地にあることも少なくない。だからこそ、そこへ行く醍醐味やありがたみがあるのかもしれないが、その道中はまさに苦難の連続であったりもする。かつてわたしが訪れたコチャルカスの聖母の聖地は、「しわくちゃにした紙のような地形」として知られる、入り組んだ山間の地域にある。標高三〇〇〇メートルを超える聖地までは、町からバスで二時間。切り立った山の斜面を縫う道路は狭く、車がすれ違う度に崖から落ちるのではないかという恐怖に襲われた。聖地に着いてからも宿はなく、運が良ければ仮設の小屋で仮眠をとれるが、大半の巡礼者は教会の前の広場で寝袋や毛布にくるまり野宿をする。巡礼がおこなわれた九月はアンデスでは真冬である。聖母を参詣した感動はもとより、仲間たちと身を寄せながら過ごした一夜は、なんとも苦行であったことを記憶している。しかし、終わってみれば不思議とまた次への挑戦を掻き立てられるのである。

受け継がれる体験

聖地を訪れる人は、家族連れや友人同士あるいは同じ村の人のあいだで巡礼者を募ってやってくることが多い。苦行をともにする家族や仲間は何よりも心強い存在である。なかには一度ならず、幾度となく聖地を訪れた経験のある人も珍しくなく、自らの記録を誇らしげに語る人もいる。そこには、かつての思い出とともに再び聖地を訪れる人もいる。子どものころに親と一緒に来た人が大人になって、今度は自分の子や家族と巡礼にやってくる。奇跡に限らず、こうした体験が受け継がれてきたことが、今でも聖地へ訪れる人が絶えぬ所以のひとつだろう。

ちなみに、アンデスにはコイリュ・リティというもうひとつ有名な聖地がある。毎年祭典の時期には、各地から多数の巡礼団が訪れ、その数は十万人を超えるという。ただ、標高四六〇〇メートルの雪山を歩くこの巡礼はかなり難易度が高そうである。

教会堂のある山の上からの眺望。麓には巡礼者を乗せたトラックやバスが次々に到着する

巡礼者の姿。写真は隣県プーノからやってきた先住民

セニョール・デ・ワンカの教会堂

特別展
「夷酋列像 ―蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界―」

「夷酋列像」は、1789年「クナシリ・メナシの戦い」で松前藩に協力したアイヌの有力者12人を描いた肖像画です。

本展示では、「夷酋列像」を近世絵画史のなかでとらえるとともに、18世紀におけるアイヌの事情やアイヌ文化の背景に隠された中国やロシアを含めた北東アジアと蝦夷地の知られざる歴史・文化を明らかにします。

会期　5月10日(火)まで
会場　特別展示館

みんぱくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」

日時　5月14日(土)　12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

研究公演
「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」

岩手県の黒森神楽、宮城県の雄勝法印神楽の公演と、震災以前から現在にかけて両神楽の調査をおこなってきた研究者と神楽師によるパネルディスカッションを実施し、地域文化の重要性とその継承のあり方について考えます。

日時　5月29日(日)
　　13時～16時(12時30分開場)
会場　本館講堂（定員450名）
※要事前申込(5月11日(水)締切)、要展示観覧券

みんぱく映画会「映画で知る中央・北アジア」

6月12日(日)
「デルス・ウザーラ」
6月25日(土)
「モンゴル」
時間　13時30分～16時30分(13時開場)
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、要展示観覧券

中央・北アジアとアイヌの文化展示が新しくオープン

6月16日(木)に、中央・北アジアとアイヌの文化展示が新しくなります。みんぱくで新しい「世界一周」にでかけてみませんか。

会場　本館展示場

音楽の祭日2016 in みんぱく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんぱくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。

日時　6月19日(日)
　　10時30分～16時30分（10時開場）予定
会場　特別展示館等
※申込不要、参加無料（当日は無料観覧日です）

お問い合わせ先
企画課　博物館事業係
06・6878・8532

カレッジシアター
「地球探究紀行」

みんぱく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心にお話しします。

時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費各回1000円（定員各回50名）

共催　産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

5月11日(水)
クジラとともに生きる――アラスカ先住民の現在
講師　岸上伸啓（本館 教授）

5月25日(水)
言葉から文化を読む――アラビアンナイトの言語世界
講師　西尾哲夫（本館 教授）

お申込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

連続講座
「みんぱく×ナレッジキャピタル――世界の『台所』」

好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで第4弾を開催！

時間　19時～20時30分
会場　グランフロント大阪北館1階
　　ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円（1ドリンク付き）、定員各回50名
主催　国立民族学博物館
　　一般社団法人ナレッジキャピタル

5月11日(水)
マダガスカルの食と調理
講師　飯田卓（本館 准教授）

5月25日(水)
南アジアの食と調理
講師　南真木人（本館 准教授）

お申込み・お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

みんぱくブックフェア&トークイベント

「フィールドワーク選書」全20巻完結に連動し開催します。選書以外に、みんぱく展覧会関連書籍等も並びます。

〈ブックフェア〉
5月9日(月)～7月10日(日)

〈トークイベント〉
日時　5月20日(金)19時～(先着40名)
印東道子×関雄二×白川千尋（「フィールドワーク選書」編集委員）
※4月20日(水)より店頭もしくは電話にて受付開始
会場　いずれもジュンク堂書店大阪本店3F

お申込み・お問い合わせ先
ジュンク堂書店大阪本店
06・4799・1090

●本館展示場の一部閉鎖について

本館展示場の一部(朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化展示)を6月15日(水)まで閉鎖いたします。

ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解のほどお願い申し上げます。

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

訃報　伊藤幹治名誉教授　享年八六

本館の伊藤幹治名誉教授が本年三月二九日逝去されました。一九七四年、みんぱく創設時に教授として着任され、第3研究部長や運営協議員として当館の研究体制および運営方針の確立に尽力し、一九八八年に成城大学教授就任のため退職された後も、運営協議員として館の発展に多大な貢献をされました。また、特別研究「日本社会における贈答の数理統計的研究」を主宰するなど優れた研究成果をあげられました。ご専門の宗教人類学や、ご自身も師事された柳田国男研究に関する多数の著作があります。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　　みんぱくフェイスブック　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　http://twitter.com/MINPAKUofficial　　電話でのお問い合わせ　06-6878-8560（本館 広報係）

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂　定員　450名(当日先着順)
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第456回　5月21日(土)
ヒンドゥー聖地と巡礼の現在
講師　松尾瑞穂（国立民族学博物館 准教授）

ヒンドゥー教の代表的な聖地ワーラーナシー

インドには古代から多くの聖地があり、各地から巡礼者が集います。交通網やメディアの発達、観光化、世界遺産化等により、巡礼のスタイルも変化しています。今日の聖地の変化について考えます。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。4月からテーマによって実施時間が30～60分になりました。

5月1日(日)　14時30分～15時　ナビひろば
万博とみんぱくアンド大阪・日本の将来
話者　出口正之（本館 教授）

5月8日(日)　14時30分～15時　西アジア展示場
グローバル化の中のアラビア語と中東地域の人びと
話者　西尾哲夫（本館 教授）

5月15日(日)　14時30分～15時　ナビひろば
南太平洋のサンゴ島を掘る
話者　印東道子（本館 教授）

5月22日(日)　14時30分～15時15分　ナビひろば
ネパールの楽師ガンダルバ――1982年の映像を手がかりに
話者　南真木人（本館 准教授）

※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

●みんぱくシャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを期間限定で運行します。

運行日　5月10日(火)まで
　　1日11往復、所要時間10分、無料
　　休館日は運休します。

※万博記念公園でイベント開催の場合は臨時に運休することがあります。

●無料観覧日

5月5日(木・祝)は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。

「みんぱくカレンダー」で休館となっていた5月6日(金)は開館します。

研究部新メンバー

飯泉菜穂子　特任准教授（先端人類科学研究部）

外資系民間企業での機会均等推進担当、フリーランス手話通訳・手話講師を経て、全国唯一の民間手話通訳養成校で手話通訳学科学科長を務めた。元NHK手話ニュースキャスター。みんぱくでのミッションは、学術手話通訳者養成の実践、カリキュラム・環境作り。

相良啓子　特任助教（先端人類科学研究部）

筑波大学大学院で修士号（障害児教育）、その後イギリスで手話言語学のMoBiL（手話類型論）を取得。主に日本手話および台湾手話など日本手話と歴史的に関係がある言語について、歴史社会言語学的観点から研究している。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）
FAX 06-6878-3716　http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会（大阪）

会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員無料（会員証提示）、一般500円

第455回　6月4日(土)13時30分～15時30分
【現代中東地域研究推進事業拠点設置 関連】
シンドバード航海記の成立の謎を追って――中東地域の民衆文化研究への新視点
講師　西尾哲夫（本館 教授）

アラビアンナイトの物語中、シンドバードの航海記はもっともよく知られているもののひとつでしょう。これまでのところ、この物語にはふたつの異なった伝承があるとされてきました。「第七の航海」にいたっては、別の物語になっています。ところが最近、従来知られていたふたとおりの「第七の航海」とはまったく異なった話を記したテキストがあることをつきとめました。新発見の写本の内容を紹介しながら、物語成立の謎を追います。

●講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。

第456回　7月2日(土)13時30分～15時30分
【新 中央・北アジア展示 関連】
中央アジアのイスラーム――ある家族の物語から
講師　藤本透子（本館 助教）

第72回体験セミナー
長良川鵜飼漁見学――鳥と語らい、川とともに生きる
7月14日(木)、15日(金)

刊行物紹介

■中谷文美、宇田川妙子 編
『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』
世界思想社　4,000円（税抜）

〈働くこと〉=〈稼ぐこと〉だろうか……「仕事」って何？「仕事でないもの」って何？ お金にならない仕事にどんな意味がある？ 世界のさまざまな地域に暮らす人々のリアリティに寄り添いながら、働くことの意味と可能性を問い直す。

味の根っこ

ハンガリーの菓子パン

カラーチ

大塚 奈美（おおつか なみ）　トランシルヴァニア日本民俗文化センター代表

焼き上がった棒状カラーチ

特別な日の菓子パン

ハンガリー人の食事に欠かせないもののひとつがパンである。キリスト教の祝祭日や年中行事、通過儀礼の際にはさまざまなご馳走が食卓に並ぶが、そのような特別な日には、通常のパンの他にカラーチとよばれる菓子パンが用意される。

カラーチの語源はまるいものをあらわすスラヴ語であるといわれ、古くは食事用のパンとほぼ同じ生地をまるめて型を用いずに焼いたものであった。後には型を用いたものもあらわれ、近世以降は牛乳や卵を加えた生地が主流となった。

カラーチと総称される菓子パンにはいろいろな種類がある。何も入っていない普通のカラーチ、くるみやけしの実の餡（あん）を巻き込んだ棒状のもの、生地を編んで焼いた編みカラーチ、生地を木の棒に巻きつけて炭火で焼いたキュルテーシュ（煙突状の）・カラーチ、結婚式などのときに用いる大きなまるいカラーチなどである。

現在では、室内のオーブンを用いて焼くのが一般的であるが、二〇世紀後半くらいまでは多くの家庭に窯があり、キュルテーシュ・カラーチ以外のカラーチは、窯のなかで焼いた。

農村生活のなかで伝えられる味

カラーチの基本的な材料は小麦粉、牛乳、卵、塩、砂糖、油脂、酵母またはイーストである。シンプルな材料であるだけに、その素材の質や扱い方が出来栄えを左右しやすい。かつては自分で育てた小麦を挽（ひ）いた小麦粉、自分の牛の乳、自分の鶏の卵を用いるのが普通であった。現在でも農村では牛乳や卵は自家生産のものか近隣の生産者から入手したものを用いるのが一般的であるが、小麦粉に関しては市販のものを用いることが多くなりつつある。自家生産の小麦は、製粉をする粉挽き場によっても小麦粉の質が決まったし、市販の小麦粉の場合はどの製品がもっとも適しているか経験して知る必要がある。

家庭料理のほとんどがそうであるように、カラーチにもそれぞれの家庭に伝わる味がある。家庭のなかで、各世代の女性たちが一緒に作る

小麦はパンや焼き菓子の材料となる重要な穀物

ことにより、その家の味が伝えられていくのである。トランシルヴァニアの祝祭日によく焼かれるのは、くるみやけしの実の餡を巻き込んだ棒状のカラーチである。特にくるみの木は多くの人にとって庭に植わっている身近な木でもあり、その実はカラーチだけでなく、他の焼き菓子にも用いられる。焼き上がった棒状のカラーチは、輪切りにして食べる。この棒状のカラーチが祝祭日の菓子として用いられるのは、比較的日持ちがするからでもある。祝祭日の前にまとめて焼き、それを少しずつ消費するのである。

現在のハンガリー国内では、この棒状のカラーチに似た焼き菓子がベイグリという名前でよく知られており、都市の菓子店などでは祝祭日以外のときにも手に入れることができる。

カラーチ作りの秘訣は、常温の材料を用いることである。生地の状態を見ながら材料の分量を加減し、よくこねてちょうどよい硬さに仕上げ、程よく発酵させる必要がある。巻き込む餡はくるみやけしの実を挽き、砂糖と、場合によっては牛乳や泡立てた卵白などを混ぜて作る。

村の女性たちは、誰よりもきれいでおいしいカラーチを作ろうと努力する。トランシルヴァニアなどの農村では、祝祭日に近所の家を互いに訪問する習慣があり、飲み物とカラーチやお菓子などでもてなす。小さな村であればほとんどの家のカラーチを食べ比べることとなるので、その出来栄えの評判もすぐに村中に知れ渡り、女性としての評価にも直結するのである。

棒に巻きつけた生地を、窯のなかではなく炭火の上で焼くキュルテーシュ・カラーチは、家族全員が参加して作ることができるものでもあり、一般の日曜日に焼かれた。棒状のカラーチとは異なり、焼き立てを食べるのが基本である。巻きつけて焼くという作業が視覚的にも興味を引きやすいキュルテーシュ・カラーチは、現在ではハンガリーを代表する菓子のひとつとなっている。

シンプルな味の編みカラーチ

くるみ餡入りの棒状カラーチ

家の庭で焼くキュルテーシュ・カラーチ

棒状カラーチ（3本分）

〈生地〉

生イースト	50g
牛乳	500ml
砂糖	150g
小麦粉	800g
塩	2つまみ
バター	100g
卵	2個

〈餡〉

くるみまたはけしの実（挽いたもの）	750g
砂糖	450g
牛乳	450ml
レモンの皮	1個分

① 人肌に温めた牛乳200mlにイーストと砂糖小さじ1を入れ、予備発酵させる。

② ふるった小麦粉に塩と残りの砂糖、卵1つ、①と残りの牛乳を入れてよくこねる。

③ やわらかくしたバターを加えてさらにこねる。

④ 温かい場所に1時間ほど置いて発酵させる。

⑤ 餡を作る。牛乳に砂糖を入れて加熱する。沸騰する前にくるみまたはけしの実を加え、弱火で少し加熱する。火からおろしたらすりおろしたレモンの皮を加えて混ぜる。

⑥ 生地を三等分して薄く延ばし、餡を塗ってロール状に巻く。巻き終わりを下にして30分ほど休ませる。溶き卵を塗って、180度に温めたオーブンで30分程度焼く。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

観光資源活用と文化保護

――中国、世界遺産「麗江古城」

高倉健一
葛飾区役所 区史編纂専門員

世界文化遺産の登録後、中国有数の観光地へと変貌した麗江古城。しかし、現在も人が生活する伝統的な街並みや文化をどのように保存していくかという問題に今直面している。

文化遺産の観光資源活用

麗江古城は、中国雲南省麗江市にある歴史的地区で、その文化的景観などが評価されて一九九七年には世界遺産に登録された。麗江古城という名称は、旧市街区の「大研古城」と、近隣の歴史地区「白沙古鎮」「束河古鎮」の三つを総称するものである。しかし、一般的には、少数民族ナシ族の中心的な都市として約八〇〇年の歴史をもつ、一番規模が大きい大研古城を呼称することばとして使われている。麗江古城は、数年前ようやく鉄道や高速道路が延伸してきたような、海抜約二四〇〇メートルの僻地にある。しかし、世界遺産を観光資源とした観光開発が進められたことで、現在では年間約二〇〇〇万人もの観光客が訪れる中国有数の観光地となっている。

この観光開発によって収入が増加し、地域経済は急速に発展したが、同時に観光地化による商店の増加や生活環境の悪化も進んだ。その結果、観光地化以前より旧市街区に住んでいた人びとの多くが周辺地域などに移住し、入れ替わるように外部から来た商売人が観光業を営むという状況となってしまった。

このような状況は、観光開発によって起きている問題であることから、文化遺産の観光資源化の是非について議論されることが多い。しかし、文化遺産の観光資源活用は各地でおこなわれており、その流れ自体を止めることは難しい。働き口の少ない地方の小都市にとって、雇用の創出は地域の存続にかかわる重要な課題である。過疎化・高齢化が進行して地域が衰退することは、地域文化の衰退にも直結する問題であり、文化遺産を観光資源化して観光開発をおこなうことは、ひいては文化の存続を支えることにもつながる。また、地域文化を観光資源活用することは、人や物が世界規模で高速・大量に移動する現代において、環境に適応して生活を続けていくための文化的行為のひとつとみることもできる。つまり、観光資源化の是非を議論することは現実的ではなく、また、問題の本質もみえてこないのである。

道の両側に続く土産店と賑わう観光客

地域文化を重視した保護を

問題なのは、文化遺産、特に有形文化財の保護において、登録物件の形態や真正性の保存ばかりが強く意識され、地域文化や住民との関係性に対しては注意が向けられていないという点である。

麗江古城のように、現在も人が生活する歴史的地区が文化遺産である場合は、歴史のなかで継続的に変化してきた文化環境の影響を受けて現在の文化遺産が形作られてきた。これは、今後も文化遺産の変容が継続することを意味している。つまり、遺跡のように「過去の文化を顕示する遺物」として現状を保存するだけではなく、地域文化の影響を考慮した包括的な保護策が求められるのである。しかし、多くの場合、文化遺産の現状形態の保存ばかりが強く意識されており、麗江古城でも同じような状況となっている。

観光用に街路壁に描かれたトンパ文字

柔軟な対応による保護の推進

ただ、無形文化遺産の活用状況に目を向けると様子が違ってくる。例えば、ユネスコ記憶遺産に登録されているトンパ文字は、元来、ナシ族の民族宗教であるトンパ教の宗教者のみが用いる文字であった。しかし、現在では、麗江古城やナシ族の文化を象徴するものとして、土産物や古城内の壁画アートに使われるなど、観光資源として多用されている。また、小学校でトンパ文字の授業が実施されるなど、ナシ族文化の新しい伝承形態としても利用されている。いずれもトンパ文字がもつ本来の役割とは違うが、ナシ族の文化イメージや民族的自覚の向上に役立っており、観光資源と民族文化保護の両面で上手に利用されている。

もちろんこれは無形文化の活用例であり、有形文化とは状況が異なる。しかし、麗江古城の文化的景観を保つために、石畳に文字入りの蓋石を用いたインフラ整備の例もある。有形の文化遺産の保護においても、状況に合わせて柔軟に対応することで、地域文化の保護も考慮した包括的な保護策が今後推進されることを期待したい。

麗江古城の街並み

手芸考

ニッポンの「手芸」――近代から現代まで

山崎（やまさき） 明子（あきこ）　奈良女子大学准教授

「手芸」が女性のものであるという見方は、いつから、どのように起こったのだろう。日本の学校教育における女子教育の科目として「手芸」が登場したころまでさかのぼってみてみよう。

女子技芸学校造花教室の図。造花は手芸の重要なジャンルのひとつだった。
出典・『風俗画報』第411号（明治43年8月）

「手芸」のベースは女子教育

日本において現在のわたしたちが知るところの「手芸」がどこの誰によって始められたのかは定かではない。明治以前から女性たちは「お細工もの」として美的な布の手仕事をしていたが、それは必ずしも「手芸」とはよばれていなかった。「手芸」が現在のように普及した背景には、戦前までの女子教育が深くかかわっている。

明治初頭、すべての子どもの就学を目指した日本では、男児に比べて女児の就学率が向上しないため、その対策のひとつとして裁縫や手芸を女児の履修科目に導入した。女児が学問を修めても何の得になろうかという時代、体系的で高度な手仕事を学校で学べることが、女児を学校に上げようという親たちの意欲につながったと考えられている。裁縫も手芸も女児のみが学ぶ教科として成立したことは、後の社会で「手芸」を女性の手仕事と考えがちなわたしたちの認識へとつながっている。

その後、女子中等教育が整備されるなかで、裁縫と手芸は女子教育の中心的科目として定着していった。衣服の縫製が機械化される以前の社会において、裁縫技術は日常に必須のものであり、また手芸技術は生活に潤いを与えたり、万一のときには内職の仕事を得るものであったりと、当時の女性たちにとっては生きるための技能として広く受け入れられてきた。「手芸」の内容は多様であったが、刺繍・レース編・編物・造花などが主流で、これら手芸品は戦前日本の重要な輸出品であり、多くは内職や工労働によって支えられていた。

「手芸」ブームの到来

女性たちが初等・中等教育を経る人が増加した大正期には、教育を受けた女性であれば誰もが手芸技術をもっているのが当然になる。もちろん社会階層や地域によって技術レベルに格差はあったが、家庭内で小物作りや編物、裁縫などをすることはたいていの場合可能になった。都市部の女性たちが、生活の必要のためではなく趣味として手芸をたしなむようになるのはこの時期である。モダニズムの時代、レース、西洋刺繍、造花などを施したインテリアや衣料品制作が、富裕な家庭の女性たちのあいだで流行する。最初の手芸ブームである。しかし、第二次世界大戦時の生活物資の欠乏と贅沢（ぜいたく）な文化の統制によりブームは終わる。

団地の手芸サークルでは互いに手芸を教えあった（昭和40年代）
出典・『手芸』No.6、p.45（昭和41年）

戦後、日本人の生活が上向く高度経済成長期、第二次手芸ブームが訪れる。高い専業主婦率と大都市での職住分離によって女性たちは終日郊外で過ごすようになる。郊外の団地では主婦の手芸グループがいくつも作られた。昭和三〇年代以降に設置された各地の婦人会館や、女性向け雑誌、ラジオ・テレビ番組などでは、料理と並んで手芸は人気の講座であった。このブームは、手作りは「ダサい」と揶揄（やゆ）されたバブル期直前くらいまで続いた。

そして現在、第三次手芸ブームが到来。以前のブームとの大きな違いは、手芸を単なる趣味としてではなく、「手芸で稼ぐ」「手芸を生かす」など手芸の社会的価値の見直しが起こっていることであろう。上の世代ほど高い手芸技術をもたない若い人たちが、ネット上のクラフト販売サイトなどで自分の作品を販売し、技術よりセンス優位という認識が広まっている。また、手芸に癒しを求め、東日本大震災の被災地で手芸のワークショップが多数開催されてきた。手芸品販売をとおして被災地で女性たちが自立していく方法も模索されている。

戦後、手芸は女性に必須の技能ではなくなった。それでも多くの女性が楽しむ趣味として残っている。三度の手芸ブームをとおして、手芸が人を魅了するのは、その背後に産業化による急激な社会の変化があった時期だということが見えてくる。モダニズム、高度経済成長、グローバル化による海外生産など、わたしたちが自ら作らなくて良い仕組みが支配的になると、人は手仕事に戻ろうとするのかもしれない。社会のなかでの「手芸」の位置づけを見ていくと、わたしたちがどんな社会を生きているのかがわかるのではないだろうか。

国内最大のハンドメイドマーケット「minne（ミンネ）」

パソコンやスマホから
簡単にハンドメイド
作品を購入・販売できる
ハンドメイドマーケット
https://minne.com/

自分で作って販売することが現在の手芸ブームでは一般化しつつある。
これはクラフト販売サイトのひとつである。図版提供・GMOペパボ株式会社

ほとけの名前

What's in a name?

末森 薫（すえもり かおる） 民博 機関研究員

「ガウタマ・シッダールタ（Gautama Siddhārtha）」「アミターバ／アミターユス（Amitābha/Amitāyus）」「バイシャジヤ・グル（Bhaiṣajyaguru）」「ヴァイローチャナ（Vairocana）」「マイトレーヤ（Maitreya）」は、仏教の尊像をあらわすサンスクリット語の名前（梵名）である。古代インドで生まれたこれらの名前は、中国で「瞿曇悉達多（くどんしったた）」「阿弥陀（無量光／無量寿）」「薬師」「毘盧遮那（びるしゃな）」「弥勒」という漢字に訳され、日本に伝わってきた。

古代インドのシャーキャ（Śākya、釈迦）族長の息子として生まれた瞿曇悉達多は、悟りを開き、仏教を開いた実在の人物である。「釈迦族の聖者（釈迦牟尼）」とみなされた瞿曇悉達多は「釈迦」と通称されるようになり、また「悟りを開いた人」を意味する「ブッダ（Buddha）」という別称をもつことになった。ブッダには、その音より元々は「浮図」や「浮屠」の漢字があてられていたが、中国の三国時代以降「仏（旧字体では「佛」）」という字が使われるようになったという。仏は、基本的には釈迦を指す呼称であるが、悟りを開いたものの称号としてさまざまな性格の尊像にもつけられる。阿弥陀は西方の極楽浄土へと人びとを導く仏、薬師はいきとしいけるものを病苦から救う仏、毘盧遮那は全宇宙を照らして人びとを悟りに導く仏である。また、修行中の菩薩の姿であらわされることも多い弥勒は、釈迦の次に悟りを開くことが約束された未来の仏であり、釈迦が亡くなってから五十六億七千万年後にこの世界にあらわれるという。

仏教の実践において、仏が名前をもつことには重要な意味がある。仏の姿や浄土世界の様相を心に描き、仏の名前を称え念じることで徳を積むいわゆる「念仏」の修行は、仏の名前を知らずしておこなうことはできない。中国甘粛省敦煌（とんこう）市にある莫高窟（ばっこうくつ）第二五四窟（五世紀）には、壁面の至るところに坐仏（ざぶつ）を連続させる千仏とよばれる図像が描かれ、その一体一体に、仏の名前を列記した経典『仏名経』に記載される過去あるいは未来に属する仏の名前が付されている。仏たちは具体的な名前をもつことで、仏教の実践の場を作り上げ、修行をおこなうものはその名前を称えることで徳を積んでいたのだろう。一方で、古代に形作られた仏には、現在ではその名前が定かでないものも少なくない。仏の坐勢や手印、持ち物、着衣などから、その名を解き明かすことは仏教美術を研究する者が担う使命のひとつである。

さて、日本では、死者を「ほとけ」とよび、故人に仏式の名前（戒名や法名）を授ける習慣がある。戒名・法名は、本来的には釈迦の弟子である証しとして世俗人と区別するために授けられる名前であるが、故人に与えられるものは、信仰心や修行による功徳の大小に拠らず、別の世界の存在になったことを示す意味合いが強いのだろう。故人に名前を与える習慣は、日本独特のものであり、その文化的・社会的背景は大変興味深い。名前の格は一般にはお布施の金額で決まるというのが、いかにも世俗的であり、当の仏たちがどう感じているのか、気になるところである。

月刊みんぱく 2016 5月号

編集後記

3月にはじめてウズベキスタンを訪れる機会があった。表紙の写真はその際、ブハラのラビ･ハウズ（池のほとり）広場で撮ったもの。ブハラはサマルカンドと並んで、シルクロードの交易拠点として古代から栄えてきた中央アジアのオアシス都市。ペルシア芸術の遺産である繊細なタイル装飾が美しい建築でも有名で、いずれ訪れてみたいと憬（あこが）れていた場所である。

写真は、ハウズ（貯水池）の四方を16世紀から17世紀にかけて建てられたマドラサ（神学校）やハンカー（神秘主義者の修道場）が囲んでいる広場で、巨大な建造物郡がそびえるサマルカンドのレギスタン広場ほどの威圧感はなく、地元の人びとの憩いの場となっている。

マドラサの入り口アーチの上に施された鳳凰のモザイクが夕映えにきらめくなか、広場中央の縁台におじいちゃんたちが集まり、ドミノのようなゲームに興じていた。若者たちはナスレッディン・ホジャ（とんち話の主人公）の銅像の周りでふざけて、じゃれ合っている。ウエディングドレスでの写真撮影に来ている新婚カップルの姿も。

ユネスコの世界遺産に指定された博物館都市でありながら、町の人びとの生活が史跡と有機的に結びついている。こういうたまり場のある町に住んでみたい。（山中由里子）

●表紙：ラビ･ハウズ広場、ブハラ、ウズベキスタン　撮影･山中由里子

次号の予告

特集

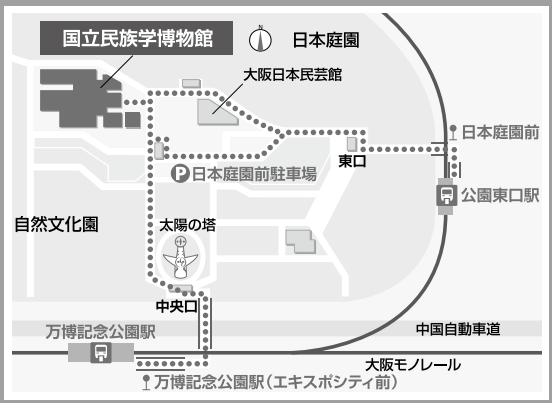
ワンロード

月刊みんぱく 2016年5月号
第40巻第5号通巻第464号　2016年5月1日発行

編集･発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子　丹羽典生　丸川雄三　南真木人　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」･「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

大阪・梅田でもお待ちしています。

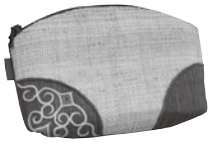
阪急うめだ本店のフェアにミュージアム・ショップが出店。みんぱく紹介コーナーも。

大阪の阪急百貨店のうめだ本店にて開催されるフェアに、国立民族学博物館ミュージアム・ショップが出店します。これからの暑い夏を元気に、そして快適に過ごすために、暮らしのなかに「世界の民芸品」を取り入れることをテーマとしたもので、アジアや中南米の民芸品を取り扱う10店舗が集結します。

ミュージアム・ショップは、フィリピン・マリナオ村の人びとの手によるマクラメ編みのバッグや、6月リニューアルオープン予定の本館「アイヌの文化」展示に関連して、北海道アイヌ協会認定の優秀工芸師による手工芸品などの逸品を厳選して取りそろえるほか、展示の解説書や図録も販売します。さらに、みんぱくのことをもっと知っていただくための紹介コーナーも併設します。あらたに発行された、本館展示の紹介冊子の配布などを予定しています。

このフェアは販売にくわえ、世界の民芸品を取り入れた空間の実例展示や、西アジアのキリムの床座と中南米のハンモックの体験展示、コンサートなども予定されているとのこと。暮らしに世界の民芸品を取り入れて、いつもとは違う夏を過ごしてみませんか。そして、民芸品をとおして現地の人びとの生活のことをもっと知りたくなったら、みんぱくにぜひお越しください。すでにみんぱくをご存じの方も、あらたな発見があるかもしれません。

フィリピンのマリナオ村の人びとによるマクラメ編みのクラッチバッグ（上、12,000円）とかごバッグ（右、18,000円）。アバカ（マニラ麻）の繊維を手編みしたものです



ニレ科の植物オヒョウの繊維を編んだポーチ。北海道、アイヌの工芸師によるものです（8,000円）

本館展示の紹介冊子は、タブロイド判の紙面8ページのなかに、みんぱくの魅力がたっぷりとつまっています

「夏のインテリアスタイル フォークアートと暮らす」

会場：阪急うめだ本店 9階祝祭広場
会期：5月25日（水）～30日（月）
　　※催し最終日は午後6時終了
主催：阪急うめだ本店

※価格はすべて税抜きです。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――――会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00～17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。